青い春

本。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青い春

【Ｎコード】
Ｎ６６５２Ｍ

【作者名】
本。

【あらすじ】
だらだら、のんびり。そんな『青春』も、ありだと思いません――――？

お天気（前書き）

思いつきで書いたので、おかしな文章になっているかもしれませんが、そのへんは見逃して頂いて、ほのぼのとした気持ちになって頂けたら幸いです。

お天気

特別な事は何も無い。ただただ日々を過ごしていくだけ。
僕等にとってそれは当然で、退屈で、ちょっと、楽しい。そういうのを、『青い春』って言っても、良いんじゃないかな。

「環汰、寝転がりなら物食うの止めなさい」
静かに発せられたその言葉に、井浦　環汰は首を竦めてパンを持つ手を止める。
「……ふぁーい」
環汰は僅かに頬を膨らませながら、しぶしぶといった感じで返事をした。環汰を叱った声の主である三上　遊斗は「宜しい」と言うように頷いてから、ほんの僅かに上げていた視線を、持っていた本へと戻して、言った。
「お前、その返事可愛いと思ってやってんなら一回死んだ方が良いよ。キモいから」
「酷っ！！いつものことながら酷えよ！ってか別に可愛いとは思って無いからな！？俺男なのに可愛さ求めてたらそれこそキモいだろ！！」
「そうだな。お前はキモいんじゃない。ウザいんだ。黙れカス」
「お前本当酷えな！！良いじゃんかまってくれても！本ばっか読んでないで俺と遊んでよ！！」
「そういうことは秋に頼め」
「だって秋寝てんじゃん！」
環汰はコンクリートの上にタオルケットを敷いて眠っている男子、宮村　秋を指差して言った。
「そうか。頑張れ」

遊斗は環汰にかまっているのが鬱陶しくなったらしく、それだけ言うと読書に集中し始めたらしく、環汰が何を言っても反応が無かった。
「むー…。暇過ぎる…」
環汰一人ごちて、握っていたパンを頬張っていると、環汰達が居る屋上の扉がばたんと乱暴に開いた。
「あ、咲(さく)」
環汰が呼ぶと、坂崎(さかざき)　咲夜(さくや)は「おー」と手を挙げて環汰達の方へ寄ってきた。
「日直お疲れー」
「おー。お前ら飯食い終わっちゃった？」
「んー、遊斗と秋はね。俺はまだだけど」
「そか。ってか、お前ら友達甲斐の無え奴らだな。オイ。ちったあ手伝えよ」
「えー、だって俺と秋はクラス違うじゃん！そういうのは遊斗に言ってよ」
「馬鹿、今のあいつに何言ったところで聞こえて無えだろ」
「だろうね」
「だろ？」
二人でパンを頬張りながら喋っている間も、咲夜が騒音と共に屋上に現れた時も、遊斗は一向に顔を上げなかった。遊斗は一度何かに集中し始めると、周りが見えなくなり、何も聞こえなくなるのだ。
「なー遊斗ー」
パンを食べ終わった環汰が遊斗に寄りかかっても、遊斗は全くの無反応だった。
「ねえ、泣いちゃうよ！俺寂しくて泣いちゃうよ！！」
「環汰うぜえ」
「咲までそういう事言うー！俺もう泣いてやるー！！」
「分かった分かった。俺が飯食い終わったらかまってやるから」
「咲…！！好き…！！」

「うん、キモい」

この春高校生になった僕等は、屋上を占領して、青い空と、温かい空気を満喫している。
昼休みになると、屋上に集まって、だべって、昼寝して、読書して。本当に普通の何でもない日々が続く。
それは僕等にとって当然で、退屈で、ちょっと、楽しい事。
だらだらとのんびりしているだけの日常だけど、何か、くすぐったい。
こういう『青春』も、けっこう良いよね――――――。

「…ん」
秋は薄らと目を開いた。
「…今、何時」
時計を確認すると、始業3分前を示していた。
「まず…っ！！」
何で誰も起こしてくれなかったの？そう尋ねようとして、気付いた。背中合わせに座っている環汰も遊斗も、環汰に寄りかかるようにして座っている咲夜も、皆――――――ぐっすりと眠っている。
「……ふふっ」
変わらないなあ、と、秋の唇から言葉が零れ出た。環汰は涎を垂らして眠っているし、遊斗は本が手元から滑り落ちてしまっている。咲夜なんかは眼鏡をかけたまま眠っている。
「しょうがないなあ、もう」
秋は呟いて、三人が眠っている方へ寄って行った。そして、
「今日は暖かくて気持ち良いからなあ…。眠くなっちゃうよね、そ

りゃ」
三人に寄りかかるようにして、座った。
「うん、だから、太陽が悪い」
おやすみ。囁く様に言って、秋はゆっくりと瞳を閉じた。

午後の授業は、サボりました。

お天気（後書き）

だらだら、のんびり。そんな『青春』モノを読みたいなあと思ったのですが、中々見つからなかったので。ぐだぐだな『青春』を満喫させたいと思います。

誤字脱字等、発見したという方がいらっしゃいましたら、報告して頂けると助かります。また、御意見、御感想が御座いましたら、そちらもお願い致します。

雨降り（前書き）

何というか、勢いで書きました。というかこの連載は勢いで書くことが多くなりそうです。。。

雨降り

「退屈」
唐突に、環汰が言った。
「…良かったな」
遊斗は読んでいた本から一瞬だけ顔を上げて、馬鹿じゃねえのコイツ、という目で環汰を射抜きながら言った。
「あーーーーーーーーーもーーーーーーーーーーーーーー超退屈ーーーーーーーーーー！！」
椅子の背もたれにがっしりと抱きつきながら、環汰は絶叫した。

「人様のクラスで騒ぐんじゃねえ。ＯＫ？」
遊斗は今さっき環汰に向かって振り下ろした拳を見せつけるようにしながら問うた。
「お、おーけー」
環汰はじんじんと痛む頭を両手で押さえて、涙目になりながらもそう応えた。
「相変わらず馬鹿だなー、環汰は」
「咲…酷え…」
あははと笑いながら環汰の頭をばしんばしんと、割と強めに叩く咲夜を、環汰はじっと睨みつけた。
「だって俺だって暇だし」
「だよなあ…。屋上にも行けねえし…」
「今日は雨だもんね」
環汰の睨みが咲夜に効くことは無く、咲夜はしらっと言い放った。環汰はため息を吐きながらも同意し、それに秋が続いた。
そう。今日は雨の日。何時も昼休みに使っている屋上にも行けず、

遊斗以外はやることも無く。遊斗を除いた三人は、暇を持て余していたのだった。
「何か喋れ、環汰」
「ええ！？俺！？そういうの無茶ぶりって言うんだろ！？無理無理無理」
「え、環汰の一発ギャグ？うわあ、楽しみ！」
「ちょっと秋さん？可愛い顔して何言ってんの？今何気にハードル上げたよね！？」
「環汰の全身全霊を込めた一発ギャグか…これは期待だな」
「ちょっ遊斗！？君今の今まで本読んでたよね！？何でこうゆう時だけ会話に混ざってくんの！？そして何で更にハードル上げたの！？」
「「「良いから早くやれよ（やってよ）」」」
「……いや、やんないけどね？」
環汰が言うと、環汰を除く三人は一斉にため息を吐いた。
「うわあ…最悪」
「今ので一気にこの場の空気が白けたな…」
咲夜と遊斗が舌打ち混じりに言う。
「え、ちょ、そんな…最初からそんな盛り上がってなかったじゃん…」
環汰が慌てて言うと、二人は更に言った。
「何言ってんの。さっきまでの盛り上がりは今日の最高潮だったよ。なあ、遊斗」
「ああ。今は環汰のおかげでマイナスの方向に最高潮だとは思うけどな」
二人に攻め立てる様に言われて、環汰はうっ、と唸った。
「あ、秋はそうは思って無いよな？」
環汰は、環汰の「やらない」発言からずっと黙ったままの秋に助けを求めた。
「……」

「……」
「……」
「……」
「「……」」
無言の攻防戦の中、遊斗が言った。
「一向に目を合わせようとしないな」
続けて咲夜が言う。
「つまり、秋も俺達と同意見ってことだな」
二人とも楽しそうに笑いながらの発言だった。
「こ、この」
環汰がふるふると震えながら絞り出す様に呟く。その姿はまるで小動物の様だった。
「ん？何だ？聞こえねーよ？」
遊斗が耳に手を当てて「聞こえない」アピールをする。良い笑顔であった。
「この、どS野郎共ーーーーーーーーーーーー！！」
うわーん、先生に言ってやるー！！等と言いながら駆け出すその姿は、とても現役高校生男子には見えなかった。

「あーあ、行っちゃった。ってか、ガキかあいつは」
咲夜がくすりと笑って言った。
「二人とも、やり過ぎだよー…。環汰可哀相」
「決定打が何を言う」
秋は咲夜の言葉に何のこと？と首を傾げる。これが腹黒とかでなく、完璧に天然なのが秋の恐ろしいところである。
そして諸悪の根源、遊斗は、
「あー、五月蝿いのが居なくなって清々した」
と、再び読書を開始。

「…まあ、退屈が紛らわせて良かったわー」
咲夜は言って、自分の席へと帰って行った。
「環汰、大丈夫かなー」
秋は始業のチャイムが鳴る3分前に、そう呟きながら自分のクラスへと帰って行った。

退屈なのはお前だけじゃねえんだよ。

雨の日は災難。ｂｙ環汰

雨降り（後書き）

環汰はある友人をモデルにしています。。。というか、『青春』の子達は普通な子達ですよねー。。。和みます。
いや、自分の作品の子達は皆可愛いですけどね。。。友人に小説の挿絵とかを描いて貰った時の私の喜び具合は半端ないです。

花粉症（前書き）

キャラが掴めないです…！！作者が一番キャラつかめて無いと思います。。。

花粉症

「ふぇっくしゅん！！」
環汰が大きなくしゃみを一つした。
「大丈夫？環汰？」
秋は言いながらティッシュを環汰の鼻に持っていき、はい、チーンして、と言った。
「ありがど、あぎ」
「ってか、どした」
遊斗が読んでいた本から顔をあげて環汰に尋ねた。
「がぶんんじょう」
「あ？なんつった？もう一回」
「かぶんじょう」
「は？」
「駄目だよ、遊斗。環汰すっごい鼻つまってるから、どうせ聞き取れやしないよ。だから、こう…察してあげないと！」
遊斗の問いに環汰が答えるが、鼻づまりのせいで一向に聞き取れない。見かねて秋が言った。
「いや、ってか、花粉症って言ってるだろ」
咲夜が正解を言う。
「あー、花粉症か」
「ぞう」
「いや、いきなり像とか言われても困りますけど」
「え？そう、って言ったんじゃないの？」
「あー。秋、遊斗はどSだから気にすんな」
「どS？何それ？」
「いや、知らないなら良いんだ。そのままの秋でいてくれ」
首を傾げる秋の肩に手を乗せ、咲夜は温かい目で言う。
「ま、それはどうでも良いとして」

遊斗が言う。どうでも良いなら最初から突っ込んでくるなよ、とは誰も言えなかった。
「お前、どうすんの？」
「何が」
「「「新入生歓迎会」」」
遊斗の問いに首を傾げる環汰に向かって、遊斗と咲夜と秋は声を揃えて言った。
「え、ぞんなんあっだの？」
「うん。ちょっと遅い様な気もするけどな」
環汰の言葉に遊斗が頷く。
「っでが、何でどうずんのっでぎがれだの？」
意味が分からない、と言うように、環汰がまた首を傾げる。
「えー、環汰、知らないの？」
意外、と秋が驚いたように呟く。
「何を？」
「ウチの高校の新入生歓迎会って、ちょっと特殊らしいんだよ」
眉を寄せる環汰を見て、咲夜はくすりと笑いながら言った。
「どぐじゅ？」
「そ」
「何でも、本来歓迎される側の新入生が何かをやらされるらしい」
遊斗が面倒臭そうに息を吐きながら言った。
「何それ超面白そう！！」
「うわーこいつテンションで花粉症直しやがった」
「ま、乗ってくると思ったよ。流石環汰」
目を輝かせる環汰に対して遊斗は面倒臭そうに言うが、咲夜の方は楽しそうに環汰の背中をばしんと叩いた。
「環汰なら、何かやりたいーって言いだすんじゃないかなーって思ってたんだよ、僕等」
秋がふふふ、と笑いを零す。
「やりたいやりたい超やりたい！！」

「でもそんなに長い時間は使えねえらしいぞ」
「そうなの？何で？」
「新入生歓迎会やって、どうしても毎年時間が余るらしいんだ。でも授業に時間をあてるにしてはちょっと短い。そこで、だ」
「新入生にも何かやってもらおうか！って流れになったらしい」
「意味分かんないよねー」
「ま、それは置いといて。で、それが段々恒例化していって、今ではイベントの一部となっているらしい」
「っへー！！良いじゃん良いじゃん超楽しそう！！」
「お前ならそう言うと思ったよ」
「うんうん。流石咲！俺の事良く分かってるう！！」
「うん、ウザい」
「キモい」
「何で遊斗にまで罵倒されたの、俺！？…ってかさ、その新入生歓迎会っていつあるの？」
「えっとねー、確か、明日だよ？」
「……は？」
「うん、だから明日」
「……は？」
「明日だって言ってんだろ糞野郎」
「遊斗酷え！ってか、明日って！何でもっと早く言ってくれなかったんだよ！！」
「だって面倒臭いし」
「くっそおおおおおおおおおおおお！！！」
環汰が机をばんばん叩きだして、遊斗と咲夜は顔を顰める。
「何、そんな準備に時間かかる事しようと思ってたの？」
「いや何か、…うん」
「ま、大丈夫だろ？大抵の事は出来るし。俺等」
「この完璧超人共が！！大好きだこん畜生！！」
「うん、キモい」

「咲って何気に酷え！！せっかくだから衣装的なもの買おうぜ！！」
「えー、僕ちょっとお金無いかもー」
「俺も無えよ。だが大丈夫だ、秋。環汰に奢らせれば良い」
「ちょっと遊斗さん何勝手な事言っちゃってんの？いや、そうしようとは思ってたけどね？」
「ならいちいち文句言うなよ」
「えー…。ちょっと咲夜さん、どう思います？この人」
「ん。俺の分も宜しくな」
「結局全員分なのかよ！！！」
環汰の絶叫が、空しく響いた。

「で、結局何すんだ？下衆野郎」
「遊斗、どんな時でも俺を罵倒しようとするその根性はある意味尊敬に値するよ」
「良いから早く言えよ。いい加減ウザいぞ？」
「ごめん咲！！ちょっと顔怖い！！イケメンが怒ると迫力凄いよね！！」
「良いから早くいってよー。練習とかしなくちゃいけないんでしょー？」
「あ、そっか。うん、実は――――――…何てどうかなって思って」
「まあ、無難だな」
「そうと決まれば、今日は早めに帰って練習するか」
「衣装も買わなきゃねー」
「うん、俺の金だけどね！」

どうなる？新入生歓迎会！

金欠です。ｂｙ環汰

花粉症（後書き）

とりあえずキャラが掴めな過ぎます。
勢いだけで書いているから悪いんですかね…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6652m/

青い春

2010年10月8日13時58分発行